

1-1 なぜ and が大切なのか？ (その1)

—— 等位接続詞が本当にわかっていますか？

and = 「そして」でいいのか？

本書の最初に、次の問題にトライしていただきたいと思います。これは東京大学の入試問題ですが、正しい英文にするのに1語を取り除く必要があり、その1語を指摘せよというものです。(スペースの都合上、英文は一部を省略してあります)

- (1) Science does and must continually try to bring theory and in fact into closer agreement.

いかがでしょうか？ この文には and が二箇所で見られますが、2番目の and の直後にある in fact という語句のカタマリがまず目に飛び込んできた方がいらっしゃるのではないでしょうか。確かに in fact は「実際」という意味でおなじみの慣用句です。しかし、結論を申し上げますと、その in fact の in が実は不要な語なのです。

おわかりになった方は「and の結ぶものに対する意識」がとりあえずは身についているといえるでしょう。逆におわかりにならなかった方で「and の意味は『そして』以外に何かあるのだろうか？」と思われた方は、残念ながらこれまで and という単語の上っ面しか見ていなかったといわざるをえません。

and は文法上「等位接続詞」と呼ばれます。文法用語を聞いたとたん拒否反応を示す方もいらっしゃるかもしれません。文法用語には「名が体を表さない」——すなわち、文字通りの意味を表さず、その理解に特別な努力を要するものも少なくないからです。しかし、

「等位接続詞」はそのまま文字通りに理解することができます。

「等位接続詞」とは、その名のごとく「等しい^{くわい}位のもの同士を結ぶことば」のことです。では、「等しい位」とは何のことでしょうか？

ここでいう「等しい位」とは『文法上の働き』が等しいものを指します。「品詞」が同じという意味ではありません。品詞が異なっても文法上の働きが同じケースがあります。(それについては1-4以降で触れます) つまり、A and B という形の場合、この A と B が「等位」、すなわち、「文法上対等のもの同士」ということになるわけです。(A and B は「文法上対等」であるだけでなく、さらに「意味的にも同一レベル」である必要があるのですが、それについては1-8でお話しします)

例えば、*Cats and Dogs* という映画がありました(2001年)が、cats と dogs は文法上、ともに「名詞」であり、また同じ「動物」という括りで「等位」といえます。

等位接続詞は and だけではありません。「しかし」を表す but や「あるいは」の or も等位接続詞として、A but B や A or B という形で前後に文法上対等のもの同士を結ぶ形をとることができます。(さらに、for や等位接続詞に準ずる扱いができる so や yet などもあります。適宜扱っていきます)

コインを投げて裏が出るか表が出るかで何かを決める (coin toss) 場合の Heads or tails? (裏か表か?) でも、heads と tails (「表」と「裏」という反対の意味でペアを組むもの同士が等位接続詞の or で結ばれていることは明らかです。

さて、以上のことを念頭に置いた上で、あらためて先ほどの英文を見てみることにします。(2つの and は便宜上それぞれ and¹、and²とします)

Science does and¹ must continually try to bring theory and² in fact into closer agreement

